

この2年間、堤防で老木はどうしたら若返るのか?の模索が続いています。樹齢100年クラスの桜は至るところで「腐れ」を起こし、スポンジ化し空洞化しています。そんな中で枝から出た根が腐れ部分に入り込み独立して栄養摂取する姿が見られます(写真「萌芽枝A」)。これは第20回(その2)でもお伝えしましたが、現代では桜に限らずイチヨウなど人為的に発根させ、その根を地面まで誘導する方法が樹勢回復に有効であると証明されています。ではこの枝を後継樹として使えないでしょうか? 筆者は2022年6~8月に老木5本の腐朽箇所の水分を測り、結果は平均値34%で「成長阻害水分点(※)」でした。さらに竹を70cmの長さにしてこれに近い環境をつくり栽培実験(写真①)をしたところ根は地面まで伸びるが鉢栽培に比べ苗の成長が抑えられる結果となり後継樹育成に課題があることがわかりました。他に利用できる部位としては「孫生え(ひこばえ)」(写真「萌芽枝B」)があります。こちらは外科手術を施し、盛り土領域に発根させ枝を独立させていく方法で、2年前から実施していますがこちらも課題が残ります。



第39回 後継樹育成へ その3

萌芽枝の可能性を探る



町内在住の樹木医

尾形政幸先生の花は桜木

この2年間、堤防で老木はどうしたら若返るのか?の模索が続いています。樹齢100年クラスの桜は至るところで「腐れ」を起こし、スポンジ化し空洞化しています。そんな中で枝から出た根が腐れ部分に入り込み独立して栄養摂取する姿が見られます(写真「萌芽枝A」)。これは第20回(その2)でもお伝えしましたが、現代では桜に限らずイチヨウなど人為的に発根させ、その根を地面まで誘導する方法が樹勢回復に有効であると証明されています。ではこの枝を後継樹として使えないでしょうか? 筆者は2022年6~8月に老木5本の腐朽箇所の水分を測り、結果は平均値34%で「成長阻害水分点(※)」でした。さらに竹を70cmの長さにしてこれに近い環境をつくり栽培実験(写真①)をしたところ根は地面まで伸びるが鉢栽培に比べ苗の成長が抑えられる結果となり後継樹育成に課題があることがわかりました。他に利用できる部位としては「孫生え(ひこばえ)」(写真「萌芽枝B」)があります。こちらは外科手術を施し、盛り土領域に発根させ枝を独立させていく方法で、2年前から実施していますがこちらも課題が残ります。



『消滅可能性自治体』リストの公表(新增田レポート)に思う。

~全国町村会・政務調査会、小田切徳美教授(明治大学)講演より~

大河原町長 齋 清志

4月24日に、新たな地域別将来推計人口に基づく『消滅可能性自治体』リスト(新增田レポート、人口戦略会議)が公表されました。大きな衝撃を持って受け止められたかたが多かったことと思います。『消滅可能性』の規定を、20・30歳代の女性が半減(2020~50年)する自治体と規定したもので、その全てが名指しで9分類に分けられています。因みに、県内35自治体における本町の順位は、仙台市と岩沼市の間の『消滅可能性』の低い方から6番目という分析でした。しかし、この女性人口が半減するという一面的な指標を持って線引きすることに、少なからず違和感を覚えています。現在、町村はじめ全国の自治体が、人口減少への対応や独自の地域づくり懸命に取り組んでいますが、この努力や取り組みに水を差しはしないか心配です。

な改善が図れるものではありません。また、本町だけが良ければいいというものでもなく、この分類が自治体の分断(格差の意識)を助長することに不安を感じています。先ずは、国全体としてこれまでの政策を検証し、効果的な対策を講じていくことが必要であると考えるところです。期しくも、本町が最も重視する『Well-being(心身と社会が健康で幸福な状態が継続すること)』こそが社会全体の目標であり、実はこの幸福度の向上が地域づくりの国際基準となっているのです。地域の持つ可能性を女性の人口推移のみで『消滅可能性』と『自立持続可能性』と視るのは、これから取り組む自治体の地域づくりへの意欲に悪影響を及ぼすことになりはしないか懸念されています。過疎対策や地域マネジメントに詳しい小田切徳美教授(明治大学)は、『初めて増田レポートが出た10年前は、移住者や特定の地域と交流を持ち続ける関係人口が増え始めた時期だったが、『消滅可能性都市』という言葉がネガティブなインパクトを与えてしまい、自治体を諦めさせ、萎縮させてしまった面があった』と

指摘。今後について、『自治体の格差が拡大している。人口減少を緩和する少子化対策も重要だが、地域住民が住み続けられる適応策がより重要になる。関係人口を増やし、地域住民と移住者が起業したり、地域内の経済循環を促して、にぎやかな過疎を目指すべきだ。』と提案しています。本町は過疎ではありませんが、今後一定の人口減少が進む中でも『Well-beingなまちづくり』による安心して暮らすことができるポテンシャルを維持し続けなければなりません。国には、先進的に頑張っている地域が『どのように取り組んだのか。』という適応策に視点を移して、それぞれの自治体の可能性を一層力強く支援いただくことを期待したいと思います。(5月17日記)



▲支援センターで親子活動中の様子。

材料 (4人分)

- ・木綿豆腐.....1丁
- ・きゅうり.....3本
- ・豚バラ肉(薄切り).....150g
- ・サラダ油.....適量
- ・粗びきこしょう.....少々
- ・塩.....小さじ1/2
- ・削り節粉末.....小さじ1

作り方

- ①豆腐はキッチンペーパーに包んで網に乗せ、しばらく置いて水気を切っておく。
- ②きゅうりはピーラーで皮を剥き、縦半分に切って1cm幅の斜め切りにする。
- ③豚肉は食べやすい大きさに切る。
- ④フライパンにサラダ油を熱し、豚肉を重ねないように広げてこんがり焼いたら、きゅうりを加えて、強火で炒める。豆腐を大きくちぎって加え、削り節、塩、こしょうで味を調える。



【ひとり分栄養価】 写真は1人分  
エネルギー:266kcal 塩分:0.8g



豆腐ときゅうりの炒め物

令和6年度大河原町食育スローガンを「らくらく(楽々)みんなで食育推進」

調理担当ヘルスメイトから一言  
豆腐から水分が出るので、強火で一気に炒めるのがおいしさのコツです。  
島田 京子(西原区)